女學雜誌

第二百五十八號
明治二十四年三月廿八日發兌

カーライル閑居の圖
ビスマーク夫人
獨逸國の婦人　三好退藏君
劉玄德至誠の涙
トルストイの飲酒辨

下六番町六番地
女學雜誌社

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 258. MARCH, 28TH. 1891.

EDITORIAL :—Mob Rule.

MISCELLANEOUS :—An Acount of the Interview with, the "Salvation Army." One's letter and his Character, (Unpōshi). The Cause of drinking Intoxicating drink and smoking. "Riugentoku's" tears of Sincerity, (Kawai Shinsui). An audience to the Telephonical Music. Bismark's Ideal. One who commits a Suicide because he has Secured the Wealth.

LITERATURE :—Japanese Verses, (Anzanshi no Ya). Modern Views on the Japanese Musical drama, (Hoshikawa).

NOVEL :—"Fuunkyō." (Unpōshi).

CRITICAL NOTES :—On Reading "A Broken Ring," (Tanabe Kaho). "Fukuin Shinpō." Woman's "Educational Magazine." "Kagetsu Shinshi."

CHILDREN'S COLUMN :—"The Flowers of the Heart," (Fumiko).

HOUSEHOLD SCIENCE.
NOTES AND NEWS.
CORRESPONDENCIES.
CONCERNING WOMEN.
PRICES OF ARTICLES.

第二百五十八號目次

社說　一揆政治(下)

雜錄　ビスマーク夫人(三好退藏)○救世軍を訪ふの記○書簡さ人の性質(雲峯子)○飲酒喫烟の根元○劉玄德至誠の涙(川合信水)電話にて音樂を聽く○ビスマークの理想○富を獲たるによりて自殺す

文學　和歌數首(東京案山子の屋社中)○淨ろりに對する近世の意見(星川逸民)○

隨感　無事の時有爲の時(愛山生)○愛(方寸子)

小說　浮雲鏡(雲峯子)

批評　附錄女學車の轍(撫象子)○こわれ指輪を讀て(田邊花圃女史)○片假名なしへの母○福音新報○婦人教育雜誌○玉はゞき○花月新誌○彼の空のはなし

兒籃　心の花(ふみ子)

家政

時事

問答　問答

女報　板垣伯の去就○毎日新聞さ中島議長○神官大會○閉會中の議員諸公○可否亭○日本の女醫○新平民界の女學校○國民的の女學校

週報

物價

The Government has, this year, legalized the following sums for the purposes of Female Education. In the Joshi, Kōtō, Shihan Gakkō, or Higher Normal School, the receipts and disbursement are as follows :—

Rec'd from the Government,	Yen	27,222.000
,, ,, various sources,	,,	9,623.000
Total receipts	,,	36,845.000
Disbursements, as follows :—Salaries of teachers,	,,	21,586.333
Sundry Expenses,	,,	4,476.117
Repairs	,,	1,443.750
Travelling Expenses	,,	97.000
Employment of menials,	,,	1,705.800
Provisions for Students,	,,	7,563.000
Rec'd from Cap. invested,	,,	205.000
Expended for School furniture,	,,	205.000
Expenses of the Tōkyō Art School are as follows :—Rec'd from the Gov't,	,,	17,800.000
,, ,, various sources	,,	14,026.190
Total receipts	,,	31,826.190
Disbursements :—Teachers salaries,	,,	15,174.000
Current Expenses,	,,	8,873.000
Repairs,	,,	1,801.000
Traveling Expenses,	,,	243.690
Supplementary teaching,	,,	4,864.500
Contingent expense,	,,	1,600.000
Total,	,,	31,826.190
Bal. of Cap. invested after deducting Current Expenses	,,	1,417.700
Expended for necessary furniture,	,,	1,417.700
In the Musical Conservatory the accounts are as follows :—Receipts,—from the Gov't.	,,	11,622.000
Receipts, from various sources,	,,	2,378.000
Total receipts,	,,	14,000.000
Disbursements :—Teachers salaries,	,,	8,366.000
Current expenses,	,,	2,170.220
Repairs,	,,	200.000
Travelling expenses,	,,	5.920
Employment of menials,	,,	487.860
Foreign teachers,	,,	2,800.000

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第二百五十八號 明治二十四年三月廿八日發兌

社説

一揆政治（下）

（其三）不自由者に眞自由あり

時未だ到らずして早く自由を擴張せば、紀綱緩み、律則解け、民は雜然として我儘とならん。今の日本國は既に其情況となれり。而して、我儘の横行するや、一揆政治となり、万事を喧嘩騷擾の聲にて叫び倒ほし、たゞ其聲の囂々たるを用て是非得失を判せんとす。今の日本は現に其景勢に陷いりたり。今后果して如何ん。

一揆政治の末期は、唯二あるのみ。云く、國亂れて民離散す、一也。云く、大壓制家出でゝ之を收攬束縛す、二也。今后の日本は再たび、專制政治に歸るべきか、もしくは家滅し國亡び、神洲と云へる譽れある國名、とこしへに輿地圖面より消滅すべき乎。二者ともに、吾人が思ふだに尙ほ忍びざる所のものなり。

吾人深く信ず、此の大危機を一轉して、平野濶望の地に逸出するの途、唯一あるのみ。此道や、たゞに日本人の爲にのみ用意せられたるにあらず、總ての人類の爲めに準備せられたり。初めより危ふきを救はんが爲に設けたる權道にあらず、万民みな必らず之を履行すべしとて、天、人の大道となし、之を畫規したり。同胞須らく痛悔すべし、今や當に此の常經に復るべきなり。

何をか大道と云ふ。古人之を稱して、上帝と云ひ、理法と云ひ、玄々と云ひ、無々と云ひ、天父と云ふ。其名の異なるは、之を解釋すると、之を識認するとの、厚薄多少淺深なるによりて異なる。而して、深きは淺きより入り、厚きは薄きより初まるが故に、吾人は未だ必らずしも万人に向ふて初來同一の信仰祈念を要むと云はず。然れども必らずや、世俗以外に此大道あり、人世以上に此の大勢力ありて、晝夜刻々、明暗處々、万邦一同、古今終世、常に人類の行爲を支配管視すと、信認せずんばある可らず。

すでに此信認あり。人の所云る自由なるものは、此大道に隨がふと、隨はざるとの自由なるのみ。而して、大道に隨ふと

の結果は、正しきなり、直きなり、達するなり、樂しきなり。之に從わざるの結果は、惡しきなり、曲れるなり、伸びざるなり、苦しきなり。此に於てか、人の自由を善用すると、惡用するとの相違、火如として直ちに分明す。何ものか敢て特と更に大道に反かんことを希圖せん。其反くは弱きがゆへ也、心之を希ふにはあらず。心之を希はず、故に久しうして、其の正しきに反るの望なきにしもあらず。

左れば、大道を信ずる人の自由なるものは、重荷を負ひ、深土を踏み、八膚五躰、毅然嚴然たることを感じて而して心中自から直きことを悟るの自由なり、彼の、何等の光明に向つて走るにもあらず、何等の生命により活るにもあらず、何等の定道ありて之を踏むにもあらず、懷疑迷徨、寸前暗黑、たゞ走るが故に走り、騷ぐがゆへに騷ぐ所ろの人に至つては、其の所云る自由なるものは、即はち何事にても爲すべしと云ふの自由也、何事にても爲すの自由とは、即はち惡事醜事をも爲すと云ふの自由なり、如此き自由は、我儘と云ふに均し、私慾と云ふに均し、動物の意志本念と云ふに均し。

此を以て、大道を信ずる人の自由は、自由ならざるが如くにして、而も自由なり、重きを負ふが如くにして、而も輕し、縛らるゝが如くにして、而も樂し、此の信なき人の自由は、甚はだ自由なるが如くにして、心常に自由ならず、負擔極めて輕快なるが如くにして、鬱々として重し、進退居止心のまゝの如くにして、實は大ひに束縛せらるゝ所ろの者あり。故に、未だ大道を信ぜざるものには、社會上の自由を多く與ふ可らず。見よ、子供には自由を與ふること少なし、父母万事に之を監督せざる可らず、子供よく理法を知るに至つて而して后ち之に自由を與ふ。社會が國民に對するの關係亦た之に似たり。而して、尤とも切に大道を信ずるものには、尤とも多く自由を與ふることを可とす。斯て、尤とも切に大道を信ぜんとせば、之に生命なかる可らず、生命なきものに向つては人其生命を寄すること能はず、夫れ大道に生命あるものは、之を天父上帝と稱す、故に天父上帝を信ずる所ろのものにして、初めて社會上至大の自由を享受するに適す。知者云く、神を信ぜざる人民は社會上の自由を受るに足らず、寧しろ專制政治に適すと。

吾人は、道德上の敎へに二途なきことを信ず、何んとなれば、

人は、善ならざることを善と信じ、惡ならざることを惡と信ずること能はざるが故也、道德にして、善を敎ゆるとせば、惣ての道德敎は終に一軌に中することを信ず。たゞ其の觀念の淺きと深きと、高きと低きと、大ひなると、小さきとに由りて、敎法に上下巧拙の差別を生ずと信ず。故に、吾人は、基督の弟子にして、唯一の天父を崇拜すと云ふと雖ども、之が爲めに、孔門の弟子、自然法の學徒を目して、共に大道に居らざるの人と考ふること能はず。もし、孔弟、理徒にして、安心立命の地を得、善を爲し、人の益を圖り、眞摯にして道を重んずるの氣象ありと云はゞ、吾人は之を以て、共に大道に列することせん。吾人が上來說き來る所ろの大道なるものは、即はち是なり。而して、道德の事は、論理にあらずして、實行にあり、もし、實行にして、宜しからずんば、大道を信ずと云ふと雖ども、未だ許容す可らず、たとひ、基督を信じ、孔丘を敬し、理法を重んずと云ふと雖ども、行ひに其實なくんば、道德上、之を奉信すと云ふ可らず。吾人が上來說き來る所ろの大道を信ずと云ふものは、即はち是なり。

あゝ、同胞、諸君もし此信に入らずんば、其享受する所ろの自由は、喩へば諸君が倒さまに握れる白刃の如し、之を揮ふこといよ〳〵烈しくば、諸君遂に自から傷けて死せん。吾人は、再たび專制政治に反ることを好まず、况んや、亡國の運を坐して徒期するものあらんや。此を以て、今の國勢を察し、衷心悶慮して禁ずる能はず、深夜床頭に危坐して坐ろに日本國の前途を思ふ。進路唯一のみ、同胞何んぞ、道を輕んずるの太甚はだしくして、國を思ふことの薄きや、あゝ同胞、諸君すでに國を思へり、何んぞ、此の一大禍元に着眼することの速やかあらざる。

（其四）女界の一撰政治

以上一國の大勢に付きて立論せり。然れども、女性の事に考へ及ぼすに、更に異なることを見ず。夫れ、姉妹は、箱を出で閨門を出で、正に自由の境界に逍遊せんとなす。然れども、不貞我慾すでに兆して、女性の我儘時代將に近づかんとす。而して、女性の我儘は、女德の墮落破滅を以て終るか、もしくは再たび之を前世の壓制に追返し、七去三從の舊主義を以て之を束縛するの外ある可らず。吾人双つながら其成行きを好まず。

左れば、今の女性も亦た大道に歸せずんばある可らず、道を信ぜざる女性の自由は、遂に女性自身を害するに於て終らん。吾人が女學界に道德教育を要するの熱望、只事にあらず、又一日にあらず。もし之を得ずんば、寧しろ其の古しへの儘なりしとを希はずんばあらず。苦慮何んか及ばん。

雜錄

獨逸婦人の實情

三好退藏君

（一）其家族細君の有樣

附たり、ビスマーク夫人の事

此頃ろ婦人教育會にて演説ありしものを速記し其のあらましを左に掲げ出さんとす……安藤たれ子

それから家族の有樣はドーであるかと云と勿論一樣ではありません。私が出入した處は中等の暮しの人で、又或は上等にはいつたかはいらんかと云ふ處と、上等の處と二三軒はいつて見ましたけれども皇族華族の處ではありません、先づ平民で上等の處の人であつた。コー云ふ處では、日本と違ふて、使つて居るものが少ない、僕や婢が少ない、大概僕が居ない、婢斗りで、上等と云ふ家で、婢二人か三人、僕はなし、僕があれば婢が二人か一人と云ふ位で、餘程少しのものであります。是れは、家の構造から其他種々の關係が違ふから、こちらと比較には勿論出來ません、けれども、妻君と云ひ、奥樣と云ふものは、餘程働く樣に思ひます。コチラの奏任一二等位に當る人の家でも、其奥さんは、買物に毎朝必ず出懸る。市に行くので、コチラの日本橋の樣な處であるが、アチラは奇麗にしてある、日本橋の樣な穢き處をあるく樣ではない。立派の市塲であるが、何でも日用の道具がある。そこへ奥樣方が朝は出懸る。丸で日々用ゆる食物を買ひ調へる。或は下女を連れて買て來る人もあるが、多くは自分自から魚位は持て來る。丁度此位の(チマ子)籠を以て入れて參ります。けれども、其日々の飲食の事は、奥樣がつかさどり、何一つ下女にまかせる事がない樣であります。そうして、臺所の方は、凡よくしまりが付いて居て、食ひ物其他、臺所の道具日用の道具は、一々戸棚に入れて、錠がついて居る、奥さんの免を受なければ、決してあける事は出來ません。奥さんの着物の隱しには

こんな袋の様なものに鍵が澤山一つにしたものを入れて居ります。夫れで奥さんに鍵を借りねば、明ける事が出來ません様になつて居る。是は先づ大概奏任一二等位の人の處でありますが、其他最上等はドンなものか存じません。併しながらこゝに一つ見ました、又聞きましたのは。私が歸る前に、有名なるビスマークの處に參りました。ビスマークは、御承知の通り、コチラの公爵に當ります、夫れで、ビスマークの奥さんは、有名なる賢婦人と聞たが、始めに面接いたしまして、一泊いたしまして、丁度三回テーブルを一つにして飯を貰ふた、其時は、凡てテーブルの上の差圖は、奥さんがされた。私が耳にははいりませんでしたが、同行したものゝ談しに、食物は皆んなに取らせ、食事をするものが、下げる時に、たしか鯉の大なのを羨たのであつたと思ひますが、丁度下げて行く時に云はれた事に、魚は其部室の冷す處の部室に持て行き、氷らして置けとコー云はれた。其差圖をせられた時、丁度皆んな外國人の客であり、其外の客が居る其際に、其魚は何處の部室に入れ、コラして置け、氷らしておけとは、あとで何かつかい道があるものと見えます。コチラでも能く氷らしたのがありますが、何かあとで趣向があるので、差圖したものと見えます、此一つを以て、見ても、最上等の夫人も、食ひ物の差圖をする事と察せられ升。

救世軍を訪ふの記　下

或集會の終りける時一人の處女妾の傍らに來り、聲を低くして「今は悔改の時なり、來つて救濟に入れよ」と云ひぬ、妾は直ちに答へぬ「願くは妾をして悔改の式を爲さしめよ」と、此處に於て妾は試驗を受けたり、其方法誠に巧みにして如何なる冷情薄心の人と雖も感ぜざるを得ざるべし、妾は其時徒涙頬を濕ほしたりき、妾を試驗せし人は誠に温厚心切の人なりければ妾が泣き居たるを見て妾の身を抱へ「是より後ち常に心せよ、今は悔改めを爲せし時なり、心情變じて舊に復せば亦惡魔來りて御身を襲はん」と云へり、妾は跪いて居りしが此時顔を抑へたるまゝ椅子に歸れり、人々妾を見つめぬ、あるは立よりて妾の顔をさしのぞけるもありき、妾は直ちに軍服（救世軍にて着する服）を得んと望みぬ、此時大將來りて妾に握手し、副將の許にと案內せり。

本營、即ち大將士卒の住所

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

本營は廣大なる家にして、ナッソー町にあり、集會場を離る遠からず、こは甚だ幽暗なる裏町なり、妾は大將に伴はれて本營に至る、戸を開けば内に一少女の立つあり、大將を見て兵式の禮を行ふ、夫れより二階の一室に入りぬ、室内の裝飾器具極めて質素にして清潔なり、無用のもの一もあるなし、是をこれ救世軍の本營となす、嗚呼彼等は斯る軍隊を以て許多の敵を防がんとするなるか。

兵卒の練習

妾は多くの質問を爲し、大將は各兵卒につき答を爲せり、此に兵卒をして練習せしむる爲め二十の問題を印刷し、一々答を爲さしむ、「兵卒は必要なるものか」（救世軍の兵士を云ふ）「何をか失敗となす」と云ふが如は即ち問題の例なり、此處に入りて兵卒たるものは、毎週是等の問ひに答へ、且幾度集會に臨みしか、何時間「戰の聲」（救世軍の發兌する新聞樣のもの也）を賣捌きしか、幾許の家を訪問せしか等の事を各々明狀するの責あり、亦兵卒は皆身躰を清潔になすを貴び、毎朝水に沐浴す、毎朝彼等の勉強は七時より報鐘を以て始まる、入營後六ヶ月は舊約書を研究し、加はふに文筆々算等の事を教授す、午後は訪問及び「戰の聲」を賣るにつとむ。

食事及び軍服

軍隊中の女子當番を以て料理を爲す、食物はパン、バター、牛乳、肉類、ソップ等尋常のもの也、兵卒一人一週の食費は四シルリング六ポンドなりとぞ、食事終つて大將祈禱を爲せり、次で會計上の報告あり、大將財政に究するが如く見えぬ、救世軍に加はるものは皆軍服を購求せざる可からず、上衣に上中下の三種あり、價値從て同じからず、婦人帽も同じく賣り渡すの仕組なり、妾は中等の上衣を購ひけり、帽は賣盡せしと云ふを以て他所より送り來るを待ちぬ。

茶宴

妾は止りて兵卒と共に茶宴に列したり、彼等は客と丁寧に交はり、亦相互の愛情密なる事骨肉の兄弟にも勝る、内に阿蘭陀人あり、斯蘭人あり、ウエルス人あり、皆心を共にす、茶宴終る頃「戰の聲」を多く手にして歸れるものあり、彼等がそを賣り殘せしは敗軍の證ありとなす、翌日妾は亦本營に至りぬ、時に帽は着し居たり、妾は直ちに取りて冠りぬ、されど室内に鏡なかりしを以て（無用のものなればなるべし）妾に似合

ふや否やを知るによしなかりき、妾は直ちに馬車にて家に歸り、鏡に對して見るに甚だ不合恰にして驚く程なりき。

「暗黑なる西部」に入る

他出するは何となく耻かしく思ひしが翌日に至り、意を決して他の女子と共に「暗黑なる西部」と云へる所に行けり、此處はヲクスフオルドの市街を西に離る事遠からぬ狹巷なり、酒店客舍多くして放蕩家無賴者の集合する所なり、救世軍が此處に入るは恰も酒店を侵擊するの覺悟あり、彼等は酒店に記號をもて「青龍、赤獅、黑猪」等と名づく、妾は始めて敵地に入る心地して恐懼の念禁ずる能はざりしが救世軍隊は大膽に進入せり、偶く一人あり、來りて一枚の「戰の聲」を求め直ちに大將の題を打ぬ、大將は微笑して之をうけぬ、客舍、酒店の下婢出て、救世軍の人々を待遇する樣種々異れり、あるひは丁寧に挨拶して金を捧ぐるあり、あるは怒つて「此處を立去れ」と叫ぶあり、亦酩酊の餘盃を舉げて軍隊の人々に酒をすすむるの醉人ありき、「戰の聲」を賣るには一種奇妙の音調もて呼ぶを常とす、妾は度々試みたりしが眞似る能はざりき、一枚も賣る能はざる一女あり、敗軍せしとて泣き叫びぬ。

救世軍の眞相

救世軍の觀察は此を以て終りとなし、妾が見聞せし所を語らんとて歸りぬ、若夫れ外形の行爲は何人も彼等の集會に於て見るを得べし、內面に於ける妾の感想を乞ふ簡短に述べしめよ、曰く彼等は其信ずる所を爲して眞に幸福を得、自己を捨て、他に盡し、虛傲を去つて眞面目に就く、ブース氏曰く救世軍を知るものは夫れ之を敬し、觀察するに至る」と、妾の見る所を以てすれば氏が此言は當れりと云ふ可し。

書簡と人の性質（下）

雲峯子

思ふにカーデナル、ニウマン氏は自己の生涯に於て其思想の發達を省て自ら快く且つ滿足し、氣に入らぬ事ありとて自らを責め、亦は苦しむが如きは決してなかりしならん、是利己者が其意の如くならざるを感じて惱む所なり、然るにニウマン氏は是に反し、省る每に自ら喜ばざる事なかりし故當に其書簡に於ても少しも自己を隱蔽する事なかりき、彼が嘗て其母に送れる書簡の一節に曰く「余は終日喜びて獨り歌ひ、獨り語り、獨り笑ひつゝあるなりと、自ら滿足快樂の內にあるを示せば其母大ひに喜こぶが故に斯く云へりしが、其後數年に

して氏が某大學に教授たりし時、學校と生徒の間に葛藤せし時の如きも氏は之を憂慮するの色なく寛大の心を以て之を處し、平然たるの様當時の氏が書簡にて明かなり、其他カウパー、カーライル夫人の如き亦自ら其行爲を知り、之を知るを喜びとなせり、然るにカーライル、シュイレル、ゲーテー、ウヲルズウヲルス、コレリッヂ等の諸大家にして其書簡を見るより其著作に於て其人物性情の明かに知らるゝ所以のものは、萬人等しく書簡によつて其性質の知らるゝものに非るを證するなり。

自らを知り、且つ樂むの可なる事は既に云ひき、されど是は自負自惚の云ひに非ず、自尊自重の心は決して自負に非ず、若自らを最高最貴の人となし、他を輕んじ、賤しむるが如きに至つては既に自負となり、傲慢となる、眞に己を知るものは其書簡に決してかゝる心の現はるゝ事なし、ニウマン氏は自らを重んぜり、而して亦氏の書簡を受くべき人をも尊敬せり、故に自らを現はすは第二となし先づ受信者を充分に敬重し、而して彼をして喜ばしめん爲めに自已を現はせり、是ニウマン氏の書簡に常に見る所なり、苟も書簡を認めんと欲するものは先づ己が書簡を受くべき人の人物性情を知り、而して之に適する様書くべし、是書簡を書くの道なり、之を知らずんば其書簡は己を現はす事なく却つて己を隱蔽するに至るものあり。

尚一の注意すべき事あり、即ち人に通知せんとする事を明白に且つ自然に(俗にありの儘といふ)寫す可し、書簡は議論若くは文章なる可からず、只對話するまゝにして一層明白なる様記すべきなり、一層明白にせよと云ふ所以のものは只筆紙を以て述ぶるが故なり、蓋し彼我相對して談話する際に當つては音聲の高低緩急あり、態度の動靜屈伸あり、以て我思想を通ずるの助けとなるべけれど書簡に於ては音聲態度の如きものなければなり、故に書簡の文字は巧妙美麗なるも其の思想を明白に自然に寫さゞるが故に讀者をして面白味を感ぜしめざる事多し、甚だしきに至つては其云ふ所を人に誤解せしむるに至る事あり、たとへ舌頭を以て語るが如く精細周到に寫すとも音調態度なきが故に少しく激語を用ゆれば直ちに輕蔑せりと解せられ、其信ずる所ろを確く執て動かざれば即ち怒れりと思はれ、精細に事を問へば徒らに人を詰るとせらる、

八

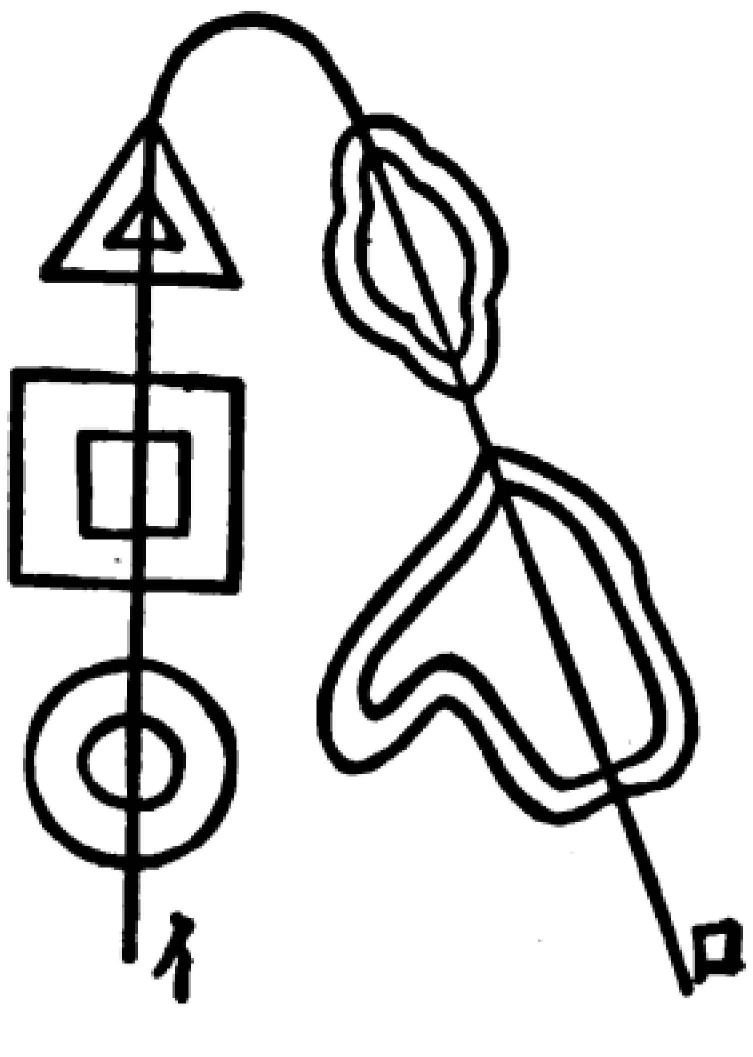
Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

斯く起草者の思想を誤解せられ易きものあるが故に明白に自然なる事は談話に勝り、其言語の用法に於ては亦談話より一層注意を深くせざる可からず、故に書簡を認むるに巧みならんとせば、談話に於て必要なるも書簡に於て無用なる事は之を棄て、起草者の心事性情のアリのまゝを讀者に知らしめん事をつとむ可し、是即ち一種の技術にして常に之を心にかけて練習せば遂に巧妙あるに至るを得ん、要するに書簡に認めたる所をそのまゝ語らば直ちに其心情を明かに知らしむるが如くなる可し、是甚だ難事なりと雖もニウマン氏の如きは此術に達したるの實例也、殊に氏が晩年の書簡に於て其巧妙なるを見る。

飲酒喫煙の根元

酒を飲み、煙草を喫するとを貪ぼり好む人情は、何如なる所ろより來る乎。トルストイ伯、近頃ろ、其理由を細かに解釋して云はく、此は、人罪に墜ちその良心を暗まさんとを欲するに因る、大抵の酒飲に向ひ「御身何故に酒を好む乎」と問はば、氣を引立つれば也と答ふべし、又煙草を好く人に向つて同樣の問を起さば、うきを霰さんが爲めと答ふべし。氣象の引立たざるは良心に責めらるゝときなり、鬱して苦しむは良心の戒しめ厳めしきときなり、飲酒喫煙の徒は、此時酒煙草を以て、此當然の罰を消さんと欲す。左れば、人常にうわさすらく、もし正氣ならば斯るとは爲し難かるべし、酒に醉ひ居たれば也と言ふ。酒は良心を傷ふものなり。余が知れる或る男、慘酷にも女を殺ろせり、後に其白狀する所ろを聞けば、彼の日劍を提さげて一旦踏込みたるが、心に責められて敢て手出しするを出來ず、即はち家に歸りて大酒盃二つ傾むけ、出直して突殺ろしぬと。又た、悪しき風儀に墜いりたる女は、大抵酒を飲みて節操を破り、少年の悪處に通ふものも亦た酒より初まる、夫れ如此く、酒を好むの人情は、良心の責めを免れんとする人の弱點より發す。而して煙草を好むの情も亦た同樣の點より發せずんばあらず。(コムテムポラリー、レビウ雑誌所載抜)

「イ」より引出し二度び通過せずして「ロ」に出る路筋いかにと問



劉玄德至誠の涙

川合信水

余輩が眞英雄を欽慕し、崇拜する、豈他あらんや、彼れ至誠なるが故なり、彼れ熱涙あるが故なり、双手劍を提げて、敵と戰ふの劉玄德は、人其強きを稱さん、されど余輩は彼れの戰ふ時よりも、戰はずして泣く時に於て、却て其強きを觀る、張飛の自殺を止めたる時、古城に義を集めし時、荊州に敗走せし時、髀肉の生ぜしを見し時、徐庶に別れし時、長坂波に諸將、妻子と離散せし時、關羽を喪ひし時、孤を托する時、何ぞ其泣くことの切なるや、余輩が我を忘れて彼を愛慕する所、實に此に在るなり、若し余輩をして、能はざれども、彼が涙の美を形容せしめば、其一滴、紫玉よりも美なりと云はん、彼れが涙の價を云はしめば、其一滴、萬金よりも貴しと云はん、然り、彼れが一滴の熱涙、至誠より、自然に、我れ知らず溢るゝ時は、幾千の豪傑、幾萬の軍士、皆其涙の中に溶解するなり、彼れが心中には、彼れが眼瞼には、幾多無形の豪傑あり、軍士あり、強きと此時の如きあらんや、弱きと此時の如きあらんや、嗚呼彼は弱きが故に眞に強し、宜なり、其席を織り、履を販りたる身にして、單騎徒手、帝王と―なるを好ずして―あれるとを、世人未だ此消息を知らず、たゞ百敗して猶笑ふの曹操を以て、戟を横へて詩を賦するの曹操を以て、英雄の本領とあす、何ぞ其眼孔の偏小なるや、余輩は英雄の大膽を愛す、雄斷を愛す、靈變を愛す、然れども其熱涙を愛すると更に深し、其至誠を愛すると更に更に深し。

○電話にて音樂を聽く

電話の重寶なるとは、數號前の女學雜誌に見へたり。西洋にては、いよ〳〵之を利用す。此頃ろ、英國ボルミンハムのミッドランド館にては、百廿五里外の倫敦、百四十里外のリバプール、九十五里外のマンチエスター、百廿五里外のブラッドホルドの四ヶ所にて興行する演劇の音樂を、居ながら聽き取るの趣向を爲し、館内の室四つに百二十八人の聽衆を容れ、四つの都の音樂を聽かせたり。聽くもの、音につれて、手を揮ひ、足を動かし、眉を揚げ、高笑ひし、すさまじき狀況にてありけるよし。

○ビスマークの理想

野に伏せる老虎、ビスマーク公が此頃の理想なるものに云はく、わが理想は此の大ひなる、此の美くしきハムバークの都

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

は、一人となり反りて余れを見ることなくして、自由に漫歩逍遥するを得んとにあり。

富を獲たるによつて自殺す

英國のラーエーと云へる邊りに、年久しく住居し、チャーレス、プラットと名のれる人あり。此頃ろ親戚某の身まかりしによりて、俄然五十万餘圓の遺産を受け、頓に大富裕となりぬ。新たに家を搆へ、下男下女を多く抱へたるが、人聲高く家美しと云へど、心にぞはしからず、夕景色を眺め、何となく浦がなしき景色すると度々なりしが、其后ち怏々として常に樂しまず、さびしき哉、不幸なる哉と叫ぶとしば／＼あり。近日遂に下男を召びて云へらく、余は舊きなじみの元の家を見んことを欲すと。則はち歩して、今は馬屋となりぬる舊屋に入り、兼て用意やしけん、ピストルを取出し、のんどに當て、一發の音と共に煙と消えぬ。あだし野の露散るとやすし、人世の安心、何を以てか富と黄金とにわらん。

文學

池袋清風大人批（東京案山子の屋社中）

鶯

、あさかすみまた消え殘る山本の梅の林に鶯のなく　八千代

、吹く風も朝日もにほふ月かせの梅の林に鶯のなく　同

殘雪

、足引の山里のいほのかけみちにたえ／＼殘る去年の白雪　江間きよ子

春雪

、春さむみ身にしむほとの朝風につもらぬ雪はけふも降つゝ　山口つる子

若菜

、うれしさを何につゝまん雲わけてつみしわかなは籠にあまれり　日高みつ子

雲

○玉くしけ箱根の山のせきもりも雪のかよひはゆるすなるらん　江間きよ子

評。關路雲なるべし

、いたづらに風にまかせて白雲のはてはいづこの山に飛ふらん　市村高彦

、見るからうちに消にけるかな夕づくる富士の高根にかゝる白雲　安藤たれ子

餘寒

、梅の花さくべき枝に雪ふりてうぐひすたにもとけぬ春かな　日高みつ子

淨瑠璃に對する近世の意見

其二

星川逸民

獨り田中古象子とは如何なる人ぞ、憶ふ千里百里の裡にあらんと、而して未だ刻燭の快を得ず、平生の憾みこれには過ぎじ、

所謂、淨瑠璃學校とは少しく謔したるにあらざるか、然れども儒し子の意、淨瑠璃のつたふべきを知りて美術の法則をこの樂に加へ、眞個に樂の樂たるべき躰形を保たしめんとするにあらば、正しき教習所を設くるは焦眉の急なるを知る、

樂をなして圓滿完全ならしめんとせば、内に向つて想を高くし、外に向つて形を潔くせざるべからず、故に淨瑠璃を論ずるもの、社會的、道德的の觀察を末技なりとて棄つるは非なり、古象子が主として改良の策を案出し、寧ろ消極的に此樂を見たるの識は、かれ頑固者流の知りたらんやうに排斥するも幾何ぞや、

子は云へり「第二の女兒教育とも云ふべき淨瑠璃師稽古の事ばかり病のごとく寺古屋流に放任するは如何あるべき所謂お師匠さんなる者を見るに妙齡無學の少婦かさなくば卒禁輕浮の老女にして花の如き女兒を扱ふの性格を有せず」と、

又云へり「滔々たる不德敗行の婦人は意氣な小格子造りの裏店より芬々たる異香を放ち來るを知らずや是れ余が淨瑠璃學校論ある所以なり」と、

蓋し樂門の機はしきを見て酸鼻するに堪へず、いかにもして成文完和の本領を得せしめばやと思ひて、淨瑠璃教習所の設けを望みしなり。其策の

一に曰く「從來の語物を撰り分けてあまり淫なる者醜なる者は用ゆまじきと」と、

潤大高遠の作なきに淫褻卑猥の患ある今に於て、この樂の一轉化を望むはかくなかるべからざるなり、撰り分くるとは調和の全きものを撰取するの義にして、改作するの意にはあらざるべし、夫れ古人の作を改むるは後人の爲すべき業にあらず、曩きに櫻痴居士の關八州繫馬を改むるや、合巻道人なる者起つて、讀賣新聞に其非を鳴らし、次て三木竹氏亦これを評せり、けだし千の巢林子、百の千前軒、素より詩界の一小蠹虫のみ、云ふにも足らず、されど其詩に斧正を加ふるに至つては、獨り詩に對するの常法にあらざるを如何にせん、夫れ想發して想人動く、眞し天を破るの妙なきも健全なり、百年を夾んで、異なりたる二想合して一となることあらば、是れ人にあらず、鬼而已、怪而已、鬼怪を語る者、鬼神誌あり、何ぞ詩に求むることをなさん、

若し相保の工夫に病あらば、そは詩の上乘にあらず、世誤つてこれを尊重せば、是れ評家の任なり、漫りに點綴彌縫するに至つては、余その手段の迂且つ鄙なるを笑はずんはあらず、古象子の意は蓋し是れにはあらじ。其策の

二に曰く「諸流派の名手を組合ふて規則的に教授致すべきこと」と、

是れ教習法の雜雜に過ぎて、法と云ふべからざるが如きを矯めんとてならん、今の教習法は所謂、内弟子なるものを集めて恣に教ゆることにて、左までことなき者が一朝にして樂師たるの牌を揭ぐるが故に、素より美術の元理に遵依し、樂の法則に順從するものにあらず、それを破せんこと今日の急務なるべし、

然れども諸流派の名手を組合ふに至つては、大に注意すべき者あり、技藝に達したる者には固僻あるもの往々にして、あれども、固僻の單に技藝の範圍に止まらずして、無學と利欲の附加するに於ては其弊恐るべきものあり、古淨瑠璃樂師の隨一なる井上播磨掾は、西派の躰型をえせしめたる人にてフシ、オクリ、ハル、ギン、などの類にも心を傾け、樂の技殆んど美妙の域に達したりしかど、深く惜みて其技を傳ふることを爲さず、床本なども秘して子弟にすら許るさず、又子弟を教ゆるをも欲せざりしと云ふ、かくては樂の樂たる所以いづくにかある、今日に於てかゝる僻見を持する者なかるべしと雖ども、猶樂門に用なき儀式のくだくだしきありて、美術の本旨に乖くこと少なからず、許しと云ふがごときも其一なり、是れ蓋し傳統を重んじて授受を叮嚀になさんが爲めなるべけれども、美術奬勵の法に背くは云ふまでもなし、其弊や黃白に依つて階級を立て、家門を以て優劣を定めんとするに至る、樂の凮して舒びざる故なきにあらず、

樂門の弊今一つあり、殊門異流の徒、互に疾視して奬勵するの道を知らざること是れなり、藝林の腐蝕を生ずるは東洋の學、術共に澁滯して進まざりしを見ても知るべし、

樂の進捗を望むが爲めに、殊門の粹を一に萃めんとするは、今一般に行はるゝ美術奬勵の法なり、此法に取る、素より不可なしと雖ども、かゝらん時は務めて樂師の固僻を芟り、陋習を破りて、樂門本來の淨地に歸らしめざるべからず、弘開して技を鬪はしめ、樂師の訴ふる所は門流の如何に非ずして廣く人の樂情に於てするならん、而して對比の利益は別に將來に向つて、能き者を生するとあるべし。其策の

三に曰く「女人と三尺頬冠り連とは法律の力を借りても別々すること」と、

四に曰く「今の大さらひの類改良すべきこと」と、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

三は純然たる防猥の策にして社會的、道德的の撿束をおかんと欲するものなり、四は樂の整理をも含みたれども、古桑子の意、初めより社會的、道德的に觀察するに在るを以て、二、即一となすも可ならんか、暫らく冗文に至るの恐あるが故に一列に置きて見ん、

余は子及び他の識者をして斯る言を發するに至らしめたるを悲まずんばあらず、眞しこの樂の嘉賞すべき所、遂に擯斥すべき所に化し去りたるは、避くべからざる理に因りたるにもせよ、淨瑠璃の樂にふさはしからぬ境涯に陷りしは事實なり、乞ふ少しく余の言ふところを聞け、

夫れ詩人が宇宙を感得したりと放言するも、その實自家の性癖を繰り返へしたるに過ぎざると同じく、樂師も亦社會的に觀察すれば、自家の生活したる社會の大意志に投合するに外ならず、即ち需用の分量外に逸し奔ること能はざるなり、まゝ實社會を憤ふることありて、未來の想社會を以てその上に加ふることあるも、意志の根基は實社會に寓して其鎖鑰を離るゝこと能はざるなり、全宇宙を貫通して無極來に透徹するもの、即ち不朽不滅の大美大妙大玄大神を領するものに至つては千古の大匠にあらざれば不可なり、而してかゝらん者は苟も出でず、其他は社會を役するにあらずして、社會に投するのみ、淨瑠璃の傾向を原ぬるの道、亦獨り此理に於てすべし、

東派の祖なる薩摩淨雲は、德川氏新たに統一の功を成し、江戸府の命令、漸く天上に重んぜらるゝの時に出で、剛毅素撲の風に染みしかば、其樂自ら淡白淸適にして人の劣情を刺衝するが如きことなく、弟子等も亦能く衣鉢を襲ぎて、柔なるは野川の油々たるがごとく、剛なるは鬼神を叱して雷霆を驅るがごとく、百流を異にせしと雖ども、要するに剛毅素樸のうちならざるはなかりき、故に新見法入は云ひぬ「昔は境町の繰、薩摩太夫筑後丹後近江肥前永閑（按、寛永以降數十年の間なるべし）上るりは酒天童子或は贊、花車等其外上るりの仕組初めに富貴に榮へ中頃世に落ち忠をはげみ義を立て親主兄の身がはりにたち孝をつくし義を專らとし哀れなることを交へ末には世に出る又富貴なる躰をつくり誠に勇をみがき又は道理をつくし哀れなることあつて人々の眞心を感發し身のたしなみにも心づきの爲めにもなる」と、是れ音同舍が「長門太夫式部太夫（按、寛文より貞享に至る間なるべし）ふごは戰さのことばかり多く荒ひ者でござる誠に土佐節は上下でりはつな者」と云ひもて東派の妖淫ならぬを賞揚したると同じく、當時の樂風を想像するに足るべし

東派の世に時めきたるは殆んど百年間なり、其間まゝ西派の樂風を傳へたる者なきにあらずと雖ども、世の嗜好を牽引すること大ならずして止めり、元文の頃常盤津文字太夫來るに及んで、東派の樂風頓みに枯槁し、宮古路豐後一派の妖淫鄙俚の樂風取つてこれに替れり、後富松、鶴賀繼いで出で、艷に耽り媚を競ひ、俗を害したるの弊實に云ふに忍びざるものあり、太宰春臺嘗つて怒つて曰く「爰に（西派の樂風を傳ふるものあるに）至つて昔物語を捨て只今の世の賤き者の淫奔せしことをかたるその詞の鄙俚猥褻なること云ふばかりなし、云々、されば淨瑠璃盛に行はれてより此方江戸の男女淫奔する者數を知らず元文の頃に及ては士大夫の族は云ふに及ばず貴き官人の中にても人の女に通し或は妻を盜まれ親族の中にて姦通する類いくらと云ふ數を知らず是れ正しく淫樂の禍なり」と、新見法入も亦曰く「今の豐後節と云ふ文句を聞けば好色に主親をたなし或は金銀を盜とり果は心中して親に歎けを掛るを手柄とする左るに因つて辟奇を聞くに一として悅ばしきことなしいま〳〵しき事のみなり下々に流行り次第に歷々の慰みとなり此故は次第に侍の風俗くづれて乞食河原者の風になり行き小身衆は豐後節の會をなし會料を取り或は太夫號を取るとかや」と、

されど是れ皆淨瑠璃の負ふ所なる乎、二家の云ふ所、やゝ器を見るに酷にして理を見るに疎なるの嫌ひなき能はず、春臺の如きに至つては殊に儒教的の眼孔を以て、苛酷の評言を下すこと獨り淨瑠璃のみにては止まらず、彼れが才氣の躍然として涌けるは嘉すべきも、未だ褊狹の見たるを免かれざるなり、要するに江戸淨瑠璃の盛衰、一半は剛毅素樸にして一半は妖艷鄙俚なりし所以の理、皆是れ世の傾向に溷依したるに外ならず、何ぞ獨り其器を憎まんや、されど德教の衝に居る者、古桑子の言に省みる所なかるべからず、啻に教家を望むのみならず、斯樂の妙を解し得てその進捗を圖る者も亦然なり、

古桑子の學校論出でたる後も、左までの結果はなかりき、道德的、奬勵的に於て、少しは見るべき者なきにあらざれども、是れ予預期したる結果にはあらざるべし、余は古桑子以後、世に表はれたる者を詳かにせんと欲す、獨り如何にせん、余や世途の煩はしきに爛れて、今猶假寐の床に在るを、索架說は他日に在り、唯記臆の底に殘れる者を擧げん、

社會的、道德的に匡正せんが爲めには、官府より府下の女樂師等に訓諭を下せしとあり、女樂師等自ら會して敗行の徒なからしめんが爲めに規約を設けしとあり、
技藝の進歩を圖らんが爲めには、先の演藝矯風會、今の演藝會となりて存し、別に大槻如電氏名手を集めて、我固有の歌舞音樂を奬勵せしことあり、
技藝の批評には、越路太夫を評せし者、國民新聞に出きと云ふ、余は遂に見ず、
樂師の傳記には、中顔居士ありて柵草紙に竹本越路太夫の傳を掲げ、次で竹本東玉の傳を著はせしことあり、
歷史的院本作家の尋究には、竹の舍主人の說、讀賣新聞にいでぬ、界に曰く「並木宗輔と並木千柳との事に就ては從來より一人なりとし或は二人なりとするの疑問ありて定かならざりしも全くは異名同人なりしなりそは其作れる所の院本を以て推すに時代の符合と云ひ且つ宗輔初めの名を千柳と云えり、云々、千柳の時代には宗輔なく又宗輔の時代には千柳なしこれを以て見るに別人にあらざるを證すべし」と、是れ主人が專門學校の科外講義に爲したる談話なりと聞く、後笑堂福聚氏書を同新聞に寄せて、其の說の由來を詳かにし、添ゆるに氏の所見を以てしたり、斯る研究は樂としての淨瑠璃にも、詩としての淨瑠璃にも、直ちに關する事にはあらで、寧ろ文學史上に表明すべき者なれども、院本作者の傳記なるを以て序に掲げぬ、
余の淨瑠璃に關する回想は如此し、幼時を回想するがごとく樂しと思はざれども、若し余と余の友の思ふ所の萬一だに、事實に化成することあらは余の悦び知るべきなり、
聞く、越路太夫の技を演ずるや、後れたる者は塀を攀ぢ、屋に登ると、新樂の妙を解する者鮮しと云ふべからず、さるに一人の進歩を希ふものなきは何ぞや、否既にこれ有るやも知れず、唯余の聞かざるのみ、
終りに臨んで、余の切に望むところの者を列擧せん、

(一)新樂の教習所を設くること、
(二)坊間の恣なる教習を廢すること、
(三)改良的の公演を盛んにすること、
(四)現今大家の手に成れる新作を望むこと、

隨感

無事の時、無爲の時

愛山生

枯野は寂寥たれども百卉の種は其中に藏するなり。平流は靜なれども臼を轉じ、轆轤を動かす力は此中に秘むなり。人無事の時、無爲の時、看來れば是波浪なし、風雨なし、然れども、其是非善惡の動機は此裏に存す。積水は終に決せざるを得ず、精神は終に發露せざるを得ず。
人固より僞善を以て親族を欺き、朋友を欺き、延て天下を欺かんとする者なきにあらず。然も千歳の鐵案は到底之を攻む。中に醜を藏し外に美を衒はんとする者必竟徒爲なる耳。
成功の秘訣は是而已矣、人の見ざる處に於て恭敬畏懼の念を失はざるに在り。人間の繁瑣なる關係を擺脱して焉らく寂寞の境を樂しむに在り。此れ其の言行を潔くし擧措を正大にするの鍵なり。源頭清し末流焉くんぞ清からざるを得ん。人の獨り居るや宜ろしく深溪の水、底を徹して清むが如くなるべし。

人は秘密を守るに堪へざる者なり、古歌に曰く、

つゝめども絶ぬ思ひになりぬれば
とわず語りのせまほしきか那、

心に一物を蓄へ口に他物を出さんとす蓋し悍馬を御するよりも難し、人の有する底の者は其態度に彰れ、其言語に彰れ、其文章に彰れ、昭々として蔽ふべからず冥々にして消ゆべからず。心に愛ある者は眼光自ら爛々たり。嗟來の食は餓死せんとする者だに食ふを屑とせず、眞情より出る涙は百寶珍よりも貴し。昔し越王士を愛す、酒を王に獻ずる者あり、流に投じ士をして下流を飲ましむ、數斗の酒、之を長江の水に和す、思ふに何の味かあらん。而して士之が爲めに涙を揮ふて越王の爲めに死せんとを願ひしものは誠に其獨り飲むに忍びざるの心に感激したればなり、人は靈妙なる者なり、眞情を以て動くべき者なり、眞情を以て動かすべきものあり。夫れ權謀術策を以て人心を攪んとす是れ小丈夫碌々たる者の爲耳、聲色を假り、邊幅を飾る終に何の用ぞ。最大の交際術は至誠人を愛するに在り。虚僞は以て巷童を瞞すべし百年の計を定むるに足らず。人間の行爲存して天地の間に在り、應さに顯して隱すところなかるべし。古今大賢の士、其生涯に於て其赤心を人の腹中に置き秘密なく城府を設けざりしもの是其隨喜者をして敬崇畏服の念を強からしめたる所以なり。

久しひ矣世の斯の如き人なきと。

愛

カ す 子

吾人一箇に成人たらんとする時、愛ある一大動機勃焉として

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

顯はれ懼くべきの權威もて吾人を震動す、吾人震動せられて一箇の成人たるを得たり、正にこれ男女の性分明するの時なり、只夫れ愛は男女を成就す、故に男らしからぬは愛なきなり、女らしからぬは愛なきを知る。

愛は己れを損して他を利せんとし慾は他を損して己れを利せんとす、而して結果する所如何、愛は遂に得、慾は遂に損す。蓋し愛はこれ爛熳たるヒウマニチーの自然なり、自然は人を不利せず、自然に從ふて損失するといふこととなけん。慾はこれ靈性を害せんとする罪惡のもとなり、慾は靈性を利せず、慾に從ふて利得するといふこととなけん。換言すれば愛は肉を棄てゝ靈に益し、慾は靈を棄てゝ肉に益す、而して靈に益する者は靈肉を益するなり、肉に益するものは靈肉を損ずるなり。この故に愛は己れを損てゝ己れを活かし、慾は人を損て己れを殺すといふ也。

何れの時何れの處にをりても必らず他に與へ得べきものありと覺悟せざる人は必らず愛あることなし、予ふ者豈に有形の物品にのみ限らんや、愛は最乘の賜物にあらずや、蓋し愛とは與ふることを意義す、パウロ曰はく愛は人の益を圖る也。

小說

浮雲胸

第九回　平和界

過去を顧りみ、將來を思ふは人の常なり、されど眼中に映じ來る事の最も大ひなるは現在なり、即ち現在を感ずる事最も切なるなり、故に眼前樂しみ多ければ何時も斯くあるが如く思ひ、前後の悲哀も忘るめり、恰も是悲しみあるの人は終生悲哀の內に沈むが如く感ずるに等し、轉變定りなきの世、一事一物變らずといふ時なし、深谷大澤に陷るは將に高山大岳に昇らんとすればなり、浮めるものは亦沈まん、悲しむ者は幸ひなり、其人は安慰を得んとすればなり、されど喜こぶものゝ幸ひなるを知らず、殊に世上の快樂浮雲の如きものに至つては眞に果なく見ゆ。

叙し來れば二女子の境遇相異ること、只千万里ならざるを見る、しづ子は去年の春父母の命によりて結婚せり、嫁ぎし家は近邊にて名ある豪富なれば出入する人も多く、一家內彼是合せて三十名もある可し、父は隱居せしと云へどこは只名の

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

み、暗に實權を振つて家内を壓倒す、一攫万金の大功を遂げしものは夫れ我を措きて誰ぞや、千言万語の空論は我一擧手に如かず、手を翻せば雨となり、手を覆せば雲となる、百事只我意の如きのみ」と驕傲止む時なく、家に在れば叱咤怒罵の聲未だ絶えたる事なし、加ふるに其妻常に夫を諫めんともせず、却つて之をすゝむるが如し、しづ子の良人は商賣上怜悧の性質なれど、常に酒を好み、酩酊の上は亂狂狼藉至らざるなし、時に不滿の事あれば直ちに花柳に車を馳す、不義不德極りなし、勿論田舍の事とて東都の貴人富者が財寶を棄つるが如く費すに比すれは入費とて多からねど、從つて收入亦東都の人の如く多からず、此儘にて打過ぎなば一家の破滅も如何なるべきかと、よそながら思ひわづらひしも多かりき、況んや知人親戚に於てをや。

家亂れては良妻を思ふと、昔の人は云ひにけり、されど良妻を思ふに至れば既に覆滅を防ぎ得べきなり、滔々たる凡夫愚人良妻を思はざるを如何せん、此時に於て良妻たる可きものは眞に狂瀾をかへし、傾屋を支ふるの功ありといふ可し、しづ子は數月の間は家内の事、口にだも云ふ能はず、父の專橫、良人の亂暴を見て時に憂苦の涙に咽び、或は悲憤の齒に袖を嚙みしめぬ、遂に決心して良人に禁酒の事を說き、次で宗敎上の事を語らんとせり、されど良人は不德惡行一日の故にあらねば容易く聞き入る可くも見えざりけり、然れども芥種程の信仰は山をも抜き、海をも倒す可し、一片の愛情は天地を動かし、鬼神をも感ぜしむ可し、況んや温情多感の人をや、豈悛ためしむるを得ざらんや、しづ子は一度決心せしより生命を犧牲にして良人の爲め、一家の爲めに盡さんとせり、或は事情の妨ぐるあり、或は勇氣の衰ふる事ありて企圖の成功いと危うかりし。

人力の如何ともなし能はざる所、是全能者の爲し得る所なり、一日しづ子の良人は酒の爲めに身に病を招き、容易に愈ゆべくも見えざりしかば父母は相談して病院に入らしむる事となりぬ、しづ子は此時こそ、良人の心を悛めしむべきなれと深く心に思ひつめ、日々家事を整理して餘暇ある每に病院に至り、滿腔の熱心をあらはして良人に道を說きぬ、其良人は先づ始めに道を知りしにあらでしづ子の愛を認めぬ、一日しづ子が良人の枕頭にて語りける時、何となく思ひせまりて涙

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

胸に充ち、云ひかけし言葉も言ひ終らで直ちに椅子に跪きて祈りぬ、起て見れば良人は兩眼より涙を流し居り、しづ子は語をつぎて「何妾に罪ありと云はば飽くまでも責を受く可し、若君にして不可なりと思召あば乞ふ今より悛め玉へ、一家の盛衰に係はる大事あり」と眞心より云へり、其良人は靜かに聲を發して「我非非なりけり、是より悛むる所あらん、酒も飲まじ、不德の行もなさじ、前非はふかくな咎め給ひそ」と云へり、平常亂行暴爲の人も一度病魔に犯され、偶ま一身を顧るの機を得ば心事全く變ずるに至らん、ことを女々しとな云ひ給ひそ、過ちて改むに憚らぬことそこよなき君子ならめ。

しづ子は其良人に道を傳へ、誠に善心に立かへらしめたり、否しづ子の力を用ひて全能者罪人を悛めしめしなり、一人の味方を得てしづ子は轉た万軍の援兵に接したるが如し、是より兩人力を合せて父母に說き、一家の人々に說き、遂に人々皆心を悛ため、不德の人なく、不義の者なきに至れり、世は混々濁り行く内に一家恰も黃金世界に似たるあり、誠に茫海波浪狂ずる間に一孤島を見るが如し、しづ子は先きの困苦をも打わすれ、熱心の謝意を日々上帝に捧ぐるに至れり、とは結婚して後、一年を經過せし時の事なり、英士壯夫のみ大事業を爲すと云ふ可からず、纎婦眞の涙を揮つて愛情をそゝぐ所、何事か成らざる可き、何物か動かざる可き。

なみ子は二月某日結婚の式を擧げぬ、萬事西洋風にとて客を某西洋館に招きぬ、衆客未だ散ぜざるに門内の馬車に打乘る二人、とはなみ子と其良人なる可し、馬車を新橋に向けて馳するは即ち所謂「婚姻後の旅行」に行かんとするにや、兩人の相貌いと喜ばしく見ゆ、これも眼前一時の笑ひあるか、さては他日悲哀の來るを知らざるによるか、さりとてはあはれむべきものなるかな、生涯の大事今や成りしが如く、過去を語り、現在を喜こぶこと限りなし、何ぞ知らん、大事是より始まり、今より着手するが如けんとは。

昔し眺めし箱根の景、今の旅路には一層うるはしかる可し、嘗て仰ぎし富岳の美、婚後の眺め果して如何ならん、何處を旅せしか、箱根に至れる時、なみ子と其良人は都を出て、一週日過ごせし後なりき、箱根を立ちて亦東海道鐵路に依り、西して行く、山亦山、河亦河も夢の如く過ぎ、滊車停れば「名古屋々々々」と呼ぶ聲す、兩人は上等の客車より出づ、乘合ひの異人頻りに英語を語りければ、なみ子は得意のさまにて應ず、良人は默し、妻は語る、是も文明世界の一新面か。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

二人名古屋に至りけるは只旅行の爲めのみ、なみ子は舊友しづ子の家を訪はんとて良人に說きて此に至れるなり、」異國の事はイザ知らず、我國にては一週日より長く婚後の旅行を爲すものなし、箱根限りにて歸京せばや」と良人は云ひしがなみ子は聞き入れず「亦立出でん事難し、とたび旅立ちける途次少しく道をすゝめて名古屋に至らん」と云ふにより、良人は其意に任せ、遂に名古屋に連れ行かれぬ。

なみ子としづ子は久しぶりの面語、如何計りうれしかるらん、兩人打とけて語るさま、昔に異らず、學校にありし日の事ども語り出で、今は共に人に嫁ぎし身とありぬとて、さきの空想を相互ひに笑ひ合ふも理はりなり、なみ子は良人と共に客舍に宿り、日々しづ子の家に至り見るに家內何となく平和にして內に入るや否や、一種云ふ可からざる美風に感染するが如く思ひぬ、そが家內の人々皆溫厚懇切にして各爲すべきの事を爲し、人を責むる事なく、從つて雇人番頭等に至るまで互に睦じく見えぬ、此に於てなみ子は思へらく如何なる故に斯くは靜肅にして整理せるやと、談話の際に之れを問へばしづ子は其嫁ぎし時の有樣より一家變遷の經歷を細しく語りぬ、なみ子は生來多くの家に出入せしが斯る家に入りし事なし、さてはしづ子の說く如く宗教は家庭に必要なるかと少しく心づきぬ、されど未だ自ら宗教に依らんとはせざりき、故にしづ子が道の事を語りけるも遂に益する所なきが如く見えぬ、されど種を蒔くもの直ちに收穫を望む可からず、風雨の澤、日月を照す事ありて後實る可し、況んや命ありて人の心に蒔かるゝ種に於てをや、收獲を得る遠き事を恨む可からず、只蒔く事をつとむるしづ子の如きは眞にほむべき哉。

なみ子は良人と共に歸京せしは都を出でゝ三週間後の事なりき、歸りて見れば東京市中頓に一變せるが如く、洋服束髮の婦人いと多くなりぬ、每日馬車を驅り、車を走せて往きかへる貴女紳士恰も蜘蛛の子を蒔き散らせるが如し、某伯の家に宴會ありとて新聞に廣告するあり、某館に舞踏會ありとて人の集ふ事あり、天地涌くが如く、人心浮き立ちて霞の如し、なみ子は官吏の妻君となりて舞踏會の仲間入りせざるは恥づべき事の如く思ひ、如何で鹿鳴館裏快樂滿つる所に入らまく望みぬ、されど是亦一種の浮榮のみ、竊かに顧みて心中不安なるを覺えぬ。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

批評

○附錄女學、車の轍　撫象子

其作者「ひさご」女史の誰たるかは、われ固より能く知れり、之を知るが故に、其筆力の秀拔にして、用意の何如にも周密なるをば、一ときは驚歎す。世上なみ〱の讀む人にして、若し此作者の何如に、年若く、何如に經驗淺き人なるかを知らば、誰し感一段ならんとす。敍事の巧みなると、當世の老作者にもをさ〱劣らず。而して、主人公の幼な氣に無邪氣なる處、既に無覺の戀愛兆して愛迹に孵化せざりしところ、惡運落下、四面かなしきとき、忽然幼腸一大進化する大變動のところ、老婦人にありふれたる、譯の分らぬ、矛盾したる、我儘なる、愚痴めける說法を言聽かする所ろ、總べて是れ、世和の要素を穿たずと云ふとなし。斯て、起手凡ならず、結末特に幽玄、全篇を通じて、才思湧くが如し。われ繰返し〱て、之を愛讀することを止めざりき。

○こわれ指環　田邊花圃

小説は人の感情を動かすにありて其行文は論ずる所にあらずと聞ぬ本篇の如きもまた其境に入て流暢なる行文力をそふるものとやいふべからん讀至る一句毎に作り物語ともをぼえずあたかも其人の口づからかついさめかつはげまさるゝ心地す猶露子女史一人我女界の犧牲となり頑冥固陋の父母に壓制せられ薄倖無情の夫に嫁し憂愁の中に日を送る姉妹等に同感を表し他の未だ嫁せざる乙女等に決心の力をそへ給ふを萬謝すをのれの友にかゝる境界に身を置ものあり其上を思ひてみさを君の斷腸と本篇の世に益する所多きをしるると共に其友の向後の方針につきて思ひ歎きうたゝ涕のはふり落るをしらず。

(104)　片假名をしへの母

埼玉縣の人、松本悌藏氏が著作にして、厚紙の片々をきり、五十音の字を寄せ作るの工夫を示す、子供の教育には面白き工夫と云ふべし。家庭の教への爲めかく新工夫する人の、續々にして起らんことを望む。

○福音新報

五十一の福音週報を編輯するの間、多少の過失なきを保する能はず、野人禮節に熟せず、言辭其當を失して人の感覺を傷なひしこさあらん、人の福音週報に對するの處置批評また其當を過まりて、吾輩の感覺を害したることなきに非ず、凡そ眞

理の消長に關せず、正義の伸縮に係はり無き一切の事柄は、審罪音遲報の塚中に埋め去り、有らゆる惡感覺を斷じ棄てんと欲す」と題し、新たに生れ來りたる福音新報は、すでに舊知己の心地す。吾人之を歡迎す。

○婦人教育雜誌

大阪の友愛會より出で、三月第一號を發兌す、小川はま、町田つる、小笠原松枝等諸女史の盡力に成る。但し、誌尾に、發行者及び編輯者として女性の名を掲げたるは、之を以て最も始となす。掲載の項目は、主として、女藝に係はる事たり。

○玉はゝき

東京金蘭社より第一號を發兌す。俗らしく、風流らしく、面白げに、眞面目氣に見ゆるものなり。

○花月誌

神田錦町より花月新誌初號を發行す。元の花月新誌なるものより、紙幅は大なり材料は似たれど差して面白きとを覺えず。

彼の空のほし

曩に日本に渡來し「世界の光」を歌ひたる、エドヰン、アーノルドの子息、レスター、アーノルドは、東京在留中、近くは伽藍、に抹香をかぎ、遠くは、芙蓉に彼景色を眺めて、フホニシア人フラ奇行傳と云へる小說を物し、此頃ろ米國にて出版しぬ。批評社界には其うわさ取々なり。

もしカーライルの評の如くんば、日本の馬琴とも云ひ得まじきが、何にせよ、小說界大革明の先導者たる、ワルター、スコットの日記、二卷、七弗半にて近頃ろ出版せらる。モトレー氏、バルジン訪問の記に、嗚呼是れ大政治家、大人物、ビスマーク翁なるかなと。スコツトの日記を讀むものも如何に其索平の淡々、易々如たるかに驚ろくなるべし。學海先生何んぞ西國馬琴の日乘を愛讀せざる。

ドクトル、マルチノウ氏の著書は、成べく今の日本人に讀ませたきもの也、近頃ろ、氏が論文、批評、演說等を一括したるもの、倫敦ロングマンより出版す。スペクテートア記者の拔摘する所によれば、カーライルが無覺論に對する氏の評は、特に、今の我國に切要なるものと覺ゆ。

ゼ子ラル、ブース氏が新計畫に對する批評嘖々たり、中に就き、尤とも實際にして尤とも讀むべきは、倫敦慈善會にて出版したる、書記ロツク氏著「ブース社會計畫の研窮」なるべし。

兒籃

心の花

ふみ子

或る學校の運動場で、二人の女の兒が遊んで居升た、一人の方は年頃七ッばかり一人の方は、九ッにもなり升だらうが同胞と見へて、いろ〳〵睦しそうに、話して居升たが、やがて一人の小さき方が。

「チヨイと姉さん、あなたは花は何が好き――アタシは子櫻が一番好きですよアノお母さんがいつかそうおしやい升た子花は櫻に限ッて子ー。だから私しは櫻が一番好きですヨ、あなたも。

と問ひ升た。姉の方は、少しく頭を振り

「イヽエ私は子櫻よりかア梅が好だよ。あなた櫻を御覽なさい美いばつかりで、何も匂がないじやあり升んか。梅はあなた、大變能薫りがして、そして又紅梅なんかは、櫻よりも奇麗な位ですもの、私しやあ梅が大好だよ。

「アラいやな姉さんだよ、私しはあなたが好だつたけれども、櫻が嫌いといふから、あなたは嫌ひサ、私しはもうあなたと遊びませんよ。

「遊ばれなくとも能うムイ升よ、いくらも梅の好な人があるから、

とて、急に二人は少しく隔り姉は向ふの壁にもたれ、妹は脇に居て外の小供と手を携へ互に額で、睨み合て居升た。

かゝる處へ廿歳ばかりの、女の先生出で來り、先刻よりの二人の話しを聞しものと見へ、にこ〳〵しながら二人の傍へ至り。

「あなた方は、なぜ喧嘩したんです、お互に中能く遊ばないといけませんよ。二人ともこちらへ入らつしやい。先生がいゝお話しをして上げ升から。

とて二人の子供を木蔭に招き

「今あなた方は、櫻が好い、梅がいゝツて喧嘩したんでしやう、夫れは、櫻も梅も、どちらも宜しい、先生はどちらも好きです。けれども先生は、夫れよりも、最つと好い花を知つて居升から、あなた方に敎へて上げ升う、

といへば二人の子供は不思議そうに、先生の貌を見詰め居ましたが、先生は又語を繼ぎ

「其花は子、一年は愚か、十年でも、百年でも散るとはなくて、そして又あなた方銘々の心次第で段々美しくなり、どんなに立派な花にでも、する事が出來るんですヨ。

と敎へ升た、二人の子供は口を揃へ

「先生そんなら、私し達にも其花を見せて下さいな、見たら好になるかも知れ升んから。

先生は二人の子供の頭を撫でながら。

「ソー宜ろしい、けれ共今直に見せて上げる事はできませんダカラ、二人とも今日から、一層氣を注けて、學校に居る時も、家へ歸つてからも、同じやうに温和しく、そして善い行をなさらなければなり升ぬ。そうすれば先生が、やがて立派な花を、あなた方の、心の中に咲せて見せて上げ升う、ダカラ是からあなた方毎日、お家でなすつた事で、善い事だと思ふ事を一々先生に聞して下さい。そうすれば先生が、能い時分に、心の花を見せて上げ升から。

と二人の子供に約束し升た。そこで二人の子供は、一圖に心の花といふものを見たいと思ひ、其后は毎日、内へ歸つてからも温和しくして、日々善い事をするやうに心掛け、自分が善いと思ふ事は、先生に告げ升た。けれ共始めの内は只、下讀を能くしたとか、弟と喧嘩を致しませなんだなぞいふ、とばかりであり升たから、まだ〳〵そんな事では、心の花は見へないと、先生が申され升た。夫れから二人の子供はいよ〳〵

勵んで、毎日々々いろ〳〵の事を、先生に告げ升したが、とう〳〵七日目にあり升た時に、二人が申し升には昨日は私は何も善い事は致し升なんだが、只一つ嬉しいとがあり升たと申升た。其嬉しい事とはと先生が問ひ升たに。

「いつも學校の行戻りに、惡戲をする男の子があり升たが、きのふはなぜか、いつもよりもひどく徒らをして、私等を追掛て參り升た、私は怖いから一生懸命に逃げ升したが家の少しこちらの橋を渡り升時、其橋の板が一枚、落ちかゝつて居升たから。私し達は除けて渡り升したが若し彼の男の子が、知らずに追掛て來て、陷るといけないと思ひ升たから、大きな聲で板の外れて居るとを敎へて遣り升た、そしたらその男の子は、もう私し達を追掛て來ずに、ぢつと立留つて私を見て居り升たから私しはしづかに家へ歸るとが出來て誠に嬉しうござり升たと申升た、

先生は大に喜んで、夫れは大變宜い事でした。夫れでこそ、心の花の蕾が、漸く開て來ました、是から又精出して、二人とも充分美しい花を、お咲せなさい心の花の咲くはもう近々で、あり升と敎へ升たと。何と皆さん、心の花とは何んであり升う。即ち己れを捨て、人の爲をはかる事であり升。

家政

經驗は生ける智識なり、其敎へは死したる文字の言ふ所ろと異なり、勢力至つて大きやかにして、人を動かすと深く且つ切なり。家政上の經驗は、スタインの政治書に書とめらるゝとなく、エリチットの小説の材料ともならず、アタラ重寶なる實際談も、たゞ一代一人と共に埋もれんとす、惜しきと幾千ぞ。今後、かゝる人々互いに、其經驗せし所ろを世に示し、且つ未だ自から經驗せざる所ろは、すでに經驗せし人に諭り、交も〴〵相敎えて活智識を增さば、一人にして百人の經驗を集め、一代にして十代のいのちを得るに均しからんとす。故に、今號を初めとして、家政篤志の人の實際談、及び交詢の問ひを掲ぐるとゝなす。

(一)。女學校にて英書和文の一通りは讀みたれど、家政の本の好きものを、未だ讀み侍らず、何如なる書が、第一に候や。(一女學生)。

(二)。年若く何の經驗もなくして嫁ぎ、初めて一家の經濟を任せられたる以來、何如なる御覺悟が尤も深かく益となりし乎、御經驗のほど問ひまいらせたし。(淺井)。

右二つの問は便利の爲め、次號にて記者が知れる人より答を需め掲ぐべし。他に問ひたき人、答たき人は、續々、申込玉へと云ふ。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

時事

○板垣伯去就

赫として一怒し乍ち分離届出で、二三日にして機嫌快ちよく直り、暫らくして又た脱黨し、此度又々急に復黨し、且つ俄然總理たれり。「細かなる理由は追つて辨ぜらるべし、現に其理由書は起草中なり」と、屢ば承はりたるが、未だ第一の理由書を見ずして早く第二の理由書を促がし來る。政海の一去一就、雲の變るが如く、波の翻へるが如く、電の閃めくが如く、毫も常規なし。吾人門外漢の察知するを得ざる所ろなり。然りと雖ども、伯にして若し久しく政黨を總理せば、第二回の議會には非常の益あるべし。兎角今の主領は、黒頭巾をのみ好むによりて甚はだ不便なる也。

○毎日新聞と中島議長

改進黨と硬派とに因緣尤とも深かりし、毎日新聞が、中島衆議院議長の辭職に對する一篇の文章は、極めて眞摯甚はだ老實、毎日子公平の論評深く要緊を得たり。

○神官大會

來四月に大會あるよし、神官諸公早く一決果行、神道を宗敎として帝室の式務より離つか、もしくは只だ帝室の式務として宗敎たるとを廢するか、二者何れかの一つに歸入すべし、然らずんば、一大危機、日ならずして近づかん。

○閉會中の議員諸公

議會閉會中は、何卒十分の材料調査に盡力ありたし、第二回に於て、綿密に討議すべき大問題甚はだ多きにあらずや。敎育の事、殖産の事、山林の事、植民の事などは、兼て御用意を請ひ置かずんば、即席の討論にては甚はだ氣遣はし。故に閉會中は、四方の遊說漫遊の如き、若しくは、條約改正論の如き、たゝラムチ、ツンツンビヤの如く一時に沸騰し、而して消へて跡なき事件にのみ、徒勞あらせられぬとを熱望す。

○可否亭

東京府下のコフヒー店は、近頃ろ八釜しき鄭永寧氏が設けたる可否亭を最初とす、去年來一つ二つ増したれど、未だ多からず。ベルリンにても、二年前より此の英國風を眞似、結果如何がならんと見しに、思ひの外に當り、此頃ろ追々增加の

形勢なるよし。我國も亦た然かありて、不潔なる待合茶屋、銅臭紛々たる茶亭の組織を早く一變したきものにこそ。

○日本の女醫

普通衛生雜誌が言ふ所ろによれば、明治十七年以來、東京にて醫術の開業試驗に及第したるもの、左の如し、

年度	前期試驗	後期試驗
明治十七年	一	
同十八年	二	一
同十九年	一	二
同二十年	八	
同廿一年	二	一
同廿二年	一五	二
同廿三年	七	二
合計	三六	八

○新平民界の女學校

同胞尙ほ新平民の事を忘るゝに似たり、女子敎育奬勵會の女敎師、マックレー、パーカー二女史は、太たく之に掛念し、近ごろ、淺草區闘左衛門町に、慈善主義の貧民女小學校を設けんとはなす。

○國民的の女學校

敎育報知記者は、日本主義の女學校初めて神田に起りたる如く風聽せり、所云る日本主義とは何如の意義たるかを知る可らず。左れど、日本主義と云ふは、何となく近頃の流行語なれば、流行に連れたる女學校は成るべく少なからんことを祈る。若し西洋熱を憂ひて新たに女學校を起すとせば、遲くも明治二十二年の頃にこそ、「日本主義」を叫破すべきなれ。今日もし時弊を憂ふるときは、寧しろ、文明義主、個人主義と云はずんばある可らず。吾人が知れる、明治女學校、成立學舍女子部などは、明治十八九年の頃ろ、すでに西洋熱に反對して勃興せしなり、何をもて今日初めて日本主義の女學校ありと云はん。「日本新聞」は、看版考を記して云く、日本主義の勢ほひ朝日の房州の山を出づるが如し、是に於て某々……及び例の日下部三之助諸先生后陣に控へ、私立女學校を設け、西洋主義を排し、大ひに日本主義を敎へ込むと云ふ、看版なる哉、看版なる哉と。

○バーネット女史

英國佈敎の慈善家來る、昨夜は有志者との懇話あり、今日午后、本鄉中央會堂にて、演說あるべしと云ふ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

問答

可愛子

問。嘗て交詢社の大會にて、ユニテリアン教師ナツプ氏の演說に、同敎說を信奉したる名家を列擧せし中に、政治家ジョンアダムス、ワシントン、リンコルン、フランクリン、ウエブスター、詩人ブライアント、ロングフェロー、著者エマルソン、ハウソーン、パーカル、博愛家ナイチンゲール、ピーター、クーパー、神學者クラーク、ブリーストン、ラードナー、ライエル、又米國ハーバート大學校近代の總長七名等を引きたり、果して以上の諸氏は同敎說に歸依せしものに候や。（鑪山人）

答。右は事實を誤つて居ります、中にもワシントンやリンコルンなどは、立派な基督信者です、思ふにナツプ氏は、少し自由の考を持つた人をば、ユニテリアンだと云つて仕舞つたのでせう、若し自由の考を持つ人をユニテリアンと申すなら、何程でも、人名を拾ひ上げることが出來ませう、西洋でも、日本でも。

問。私は池袋先生に和歌の添删を願ひたいのですが、先生の御住居も存じません、且つは御諾否もわかりませんから、貴社より御紹介は願はれますまいか、又先生御著作の淺瀨の波は、何れの書居にありますか。（一商店の愛讀生）

答。紹介を致しませんでも、直接に池袋さんに直して頂かられます、池袋さんの御住所は、京都上京區烏丸通り一條上るであります、束脩は五十錢です、月謝の事に付ては、委しく女學雜誌二百四十九號に出て居ります、又淺瀨の波といふ本は弊社にて賣捌き致します。

問。「いらつて」とは、如何なる事に候や。（鑪山人）

答。氣の急き立つことです。

問。「いらつめ」のワケを伺ひ度候。（鑪山人）

答。「いらつめ」は淑女といふことの雅語です。

問。女子の讀んで宜しい小說は何々にて候や。（安川瀧子、小俣のぶ子）

答。谷間之姬百合、經國美談、佳人之奇遇、新磨妹と脊かがみ、國民小說、閨秀美談、などでせう、マダ外にもありませうが、一寸思ひ當りません。

通信

可愛子編

●越後高田通信——廢娼運動　〇當地には苦界に沈み居る姉妹にして一期（三ケ年）の苦役を終はり漸く解放され將に自由の身とならんとするもの四十七名あるが彼等姉妹は各其身に幾多の前借あるを以て樓主は表面「前借は已れに不利益なり」と（裏面は充分身代金前借等の利を取り居るも）云ひて再び泥界に陷らしめんと種々密議の末食すに甘言を以てし惑すに籠絡を以てし既に彼等の術中に誤覧化され繼續願を出すもの續々顯はれしかば當地基督敎青年諸氏は樓主の不義不德を怒り由々敷大事なりと奮然蹶起之れか運動に着手せり即ち去る十三日茶町大惣亭に於て演說會を開きしに聽衆二百名の上に出で滿場粛然靜聽せり〇次に傳道布教のため基督敎青年演說會を去る十六日同亭に於て開きしに聽衆百五十餘名ありたり辯士の中廢娼の意を含蓄せしめて演說せしものありき〇去る十九日は廢娼演說第二回を矢張り同亭にて開きしに前回に增しての盛況にて開會の始め有志の婦人は大關和子の新作廢娼々歌をオルガンに和して唱ひ次に多くの辯士交々起て演說せり初めには貸座敷樓主は雇入の暴漢と妨害を試みしも諸氏の積誠熱心滿面に溢れ益々聲を擧げ舌を爛し演ぜし故彼等は眞心に項門の一針を刺さるゝ思ありし殊に又聽衆も拍手喝采諸氏の精神を賛したれば流石の樓主暴漢も狐鼠々々然として立去りたり此問題の起りしより爾來毎日當地北辰新聞紙上に樓主の無情殘酷を責め輿論を喚發作興せんと盡力せり〇當地青年諸氏が發憤興起同胞姉妹を救はんとして頻に運動し居るを見て私立高田女學校教員大關和子は是れ偏に男子に一任すべきに非らずとて有力者の贊成を得て音樂會を催ふし其收益を以て青年諸氏か運動の幾分を補はんとせり。

●江州通信　〇貸坐敷廢業者の成業　長濱の遊廓なる南片町の一隅よありて貸座敷營業をなせし青木吉兵衛氏は兩三年前大に悟る所ありて廢業し更に縮緬織業に轉じ從來の藝娼妓を其儘に傭ひ機業に從事せしめしが以來頗る好成績をあらはせしよしなるが去る十五日當地議事堂に於て農工藝品品評會ありし節自家の織成す縮緬に對して壹等賞を得たりといふ。

〇勸懲の實あるやを疑ふ　曾て大坂朝日新聞紙上にて毒婦の名を得たる島津お政は監獄放免後糊口のため各地の寄席にて懺悔談とて已が經歷を演出し先日來縣下に來り同じく興行せしが惡毒見聞するに堪へずとか聞く且つ彼が男裝を爲して洗湯に來るを以て人々其女浴に入るを怪む程なりといふ彼の行爲果して自白の如く勸善懲惡となるや否を知らず當局者の注意を仰ぎたしと訴ふるものあり。

●香川縣高松市通信　讃岐婦人談話會　一昨十五日當市時和園に定期惣集會を開く會者八十餘名會長に神原きよ子（書記官の夫人）副會長に川崎よし子改撰し惣理に從前の通柴原知事婦人かれ子を推撰し客員としては三澤裁判長天野撿

事正寺田警部長祚原非職官次田高須兩參事官山路師範校長其他の紳士十數名あり今后益々質素を主旨とし婦人處世的要務を實行することに勉むる筈なり尙同會は這回讃岐婦人進德會と改稱せり。

○讃岐令成婦人會は佛教主義の團体にして毎月十五日一回常集會を開き一百餘名の會員必ず出席し男子兩三名の談話あり會員は商家の妻女令嬢其の多きを占む。

●北海道通信　○渡島國松前郡教育會は明治十七年の創立にして現今會員二百餘名あり毎月一回例會を開き演說討論等をなし又毎月一回教育雜誌を發行し之を會員に頒布す。

○山名次郞、茨城正收等の諸氏發起人となり北海道教育會てふものを設け三月七日其發會式及び第一總會を兼ね開かれぬ當日博士佐藤昌介氏の教育上に關する演說ありし由。

○新渡邊稻造氏無事札幌にあり右の教育會に於て或は北海禁酒會に於て演說し又近々靑年會に於て演說さるゝ由何れの隅も氏の歸朝を祝し歡迎の聲盛なり。

女報

可愛子編

●行啓　皇后陛下には去る十七日午後二時御出門、靑山御所へ行啓あらせられたり。

●上の山離宮　例年盛夏の節、皇女常の宮殿下、御避暑の爲め成らせ給ふ、上州伊香保の離宮は、上の山離宮と名稱を附せられたる由に承る。

●兩妃殿下御臨場　去る廿一日午後一時より、華族女學校の講堂に於て開ける、大日本婦人教育會へは、有栖川、北白川、兩妃殿下にも、御臨場あらせられし由。

●常宮殿下　皇女昌子内親王殿下には、去る十九日午後、華族女學校へ成らせられ、教場等御覽舉て還御あらせれたり。

●山縣伯爵夫人　は嘗て濱松に於て、急病を發したる以來、目下氣管支加答兒に變症し、大磯の別莊にて療養中なるが、餘程の重症なりと聞えぬ。

●米國公使の未亡人　我國駐劄の米國公使故スヰフト氏の夫人は、來月上旬出發、本國へ歸國せらるゝ由。

●星野光太氏　は下谷教會の牧師を辭し、三年靜かに學ばんとて、其間だ橫濱フエリス女學校の教頭たることを諾し、九月より趣ひる。

●齋藤さめ子　久しく明治女學校の教師たりし同女史は、前橋の判事羽生顯親氏に嫁ぐ。

●東京府高等女學校　漸次生徒の員數も增加し、現在生徒三百名に及び、四月には卒業生十五名あり、中には教員志願のものもありて、卒業の上は府下小學校教員に從事するとか、因に云ふ、同校にては、地方より出京する生徒の爲め、同校教員豐田芙雄子の宅に寄留を依囑したる由。

●婦人教育會の演說　同會にては、去る廿一日午後一時より、麴町區永田町華族女學校に於て、常集會を開き、三好退藏(獨逸婦人の有様を視て我が姉妹に望む所あり)、添田壽一(外國に在る我職業婦女の事より女子の教育技藝に論及す)、二氏の演說ありたり。

●慈惠醫院幹事會　去る十五日、同院に於て、幹事長有栖川一品親王殿下の御息所を初め、後藤小笠原兩伯夫人等都合五名の幹事集會し、幹事會を開き、本年度經費支出案に付協議し、直に議決せり、此日高木同醫院長にも列席せり。

●產婆志願者　去る廿三日より、東京府廳に於て執行せし、府下產婆開業試驗の志願者は、內務省本免狀志願者七十二名、假免狀志願者十三名なりしと。

●女子と基督教　伊澤修二氏喟然として歎じて曰く「余は余の女をして、寧ろ女壯士たらしむるも、猶基督教徒たらしむるに勝ると」氏は斯くまでに基督教を嫌ひ給ふにや、余は却て現今の女子、及び女子教育家が、基督教を知らずして、迷路に彷徨するを歎かはしくも、憐れに思ふものを。

●近日社員景山英女を訪ひしに　同女は、甚だ星亨氏の妻君に感心し、稱贊せり、又星氏の妻君は、陸奧宗光氏の妻君と近頃中よく交際し居る由話しぬ。

●嗚呼何事ぞ　吾人が先きに、或る新聞よりして、櫻の植附許されずと聞きしは、誤りなりしか、近日の新聞は報じて云ふ、吉原仲の町の櫻は、本年も例年の通り、四月二十日より、植付の儀、許可せられたりと、吾人又何をか云はん、破廉恥なきの貴、果して誰にか歸する。

●女學雜誌と櫻花　都新聞は記して曰く「女學雜誌記者は太白を擧げて櫻花の爲めに祝するならん洲崎遊廓の櫻植込は首尾よく聞屆け難しの指令を受けたりと」吾人固より之を祝す、然れども敢て太白を擧ることをなさず。

●娼妓矯風會　深川區富岡町前仲町の某々等は、去る十九日娼妓矯風會てふものを設けたしと、警視廳に出願せり、其目的は、娼妓雇入の招介をなし、其步合を貰ひ受け、之を積みて、年期滿ちたる上、其積金を以て、正業を營ましめんとするにあり、警視廳にては、許可するの限りにあらずとて、之を却下せりといふ、吾人は勸告す、斯くの如き、奇怪なる計畫をなすの暇あらば、何ぞ起て廢娼の運動をなさゞるかと。

●橫濱婦人慈善會の事業　近日臨時慈善會を開かんと、委員の諸婦は其の準備に奔走し居れり、元來同會は貧民救濟の爲め、慈惠病院を設立する目的にて、既に地所も購入の積立金も、八百圓に上りたれども、建築費等迄には尙不足あれば、今回の企てあるなりと云へり。

●宇治茶山茶摘女の日給　は子供八錢、大人十五錢位なりとぞ。

●近江婦人慈善會犬上支會　にては、去る二十一日、彥根職人町明性寺に於て、其翌二十二日物郷村字石畑村偁寺に於て、例會を開きたり。

●三重縣下の音樂　は一時流行の由木紙に記せしが、此頃は不振の姿にて、津市養正小學校にては、女生にのみ音樂を課し居れりといふ。

●郡長大に女子教育を奬勵す　滋賀縣伊香西淺井郡長門野安太郎氏は、此程郡內人民に訓令を發し、一家の爲め、一國の爲め、女子教育の必要にして、忽諸に付す

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●風流慈善會　陸前仙臺市にては、南山老人自ら會主の任を負ふて、風流慈善會を開きたり、其席費入式等の收入は、總て貧民救助に充つる由、俳諧社會の美くしき現象と申すべし。

●山梨縣下の女子岡山孤兒院に義捐す　山梨英和女學校の女教師生徒及び有志の婦人等は、岡山孤兒院に向て、衣類足袋などを添へ贈りたり、石井氏は大に喜びて、其旨我が社に報じ越しぬ。

●貞婦褒章を賜はる　山形縣羽前國、北村山郡尾花澤村、大字尾花澤、鈴木金吉母竹岡ヤサは、資性溫良、歸嫁以來、善く夫及舅姑に仕事し、明治元年夫難病に罹り、荏苒十五年にして沒し、姑亦尋て重症に陷り二十三年終に死去す、其間前後二十餘年、看護療養到らざるなく、傍ら家計を經理し、子女を教育し、能く孝貞慈愛の道を盡す、洵に奇特なりとて、緑綬褒章を下賜して、其善行を表彰せられたりと。

●北海道室蘭に於ける製絲及び機織業は　專ら屯田兵家の婦女子をして之に當らしめ、大に獎勵法を設けて、修業傍ら家計の一助を計らしむるといふ。

●小笠原島女學の景況　東京府所轄小笠原島の學校及び生徒の人員を取調べしに母島の中沖村尋常小學校には女生徒十四人同村人口女二百三十六人、學齡女四十七人、就學女十四人、不就學女三十三人、同北村尋常小學校には、女生徒五人、人口女百〇七人、學齡女十八人、就學女十八人、不就學女十三人、父島中大村尋常小學校には、女生徒十四人、人口女二百六十二人、學齡女三十人、就學女十四人、不就學女十一人、同島扇村尋常小學校には、女生徒十二人、人口女百七十八人、學齡女二十八人、就學女十一人、不就學女八人なりといふ。

●ヴヰクトリア內親王の結婚　去る二月二十七日、英國發電に、故ダッヅリ伯の第二子は、皇太子ウエールス親王殿下の第二女ヴヰクトリア內親王と、結婚の契約をなしたる旨、公示されたり。

●コホ氏の女弟子　博士コホ氏の肺病治療法を研究せんとて、各國の醫學生伯林に蝟集せることは屢ば報道せしが、婦人にて此行を爲すは、米國ボストン府の傳士ヘーレン、ベッツ孃を以て嚆矢と爲す、孃はペンシルヴアニヤ州の女醫學校の卒業生にして、今度同校の委員として派出するなりと云ふ。

週報

●官令　二十三日法律を以て帝國議會の協贊を經たる度量衡法を裁可公布せらる
○同日勅令を以て海軍用地租稅前金拂の件を裁可公布せらる。
●政治　十七日前島遞信次官の辭表聞屆けらる○十八日日本人解停○二十日立憲自由黨大阪會議板垣伯總理を承諾する旨發電せり

品名	三月廿六日
白米(一円ニ付) 一等米	九升七合
二等米	一〇〇
三等米	一〇六
四等米	一〇八
五等米	一一二
正米(一円ニ付) 越中米	一斗四升五合
美濃米	一四四
尾張米	一四二
肥後米	一三六
一志米	一三四
雜穀(一円ニ付) 本貫大麥	二斗三升〇合
上州小麥	一四八
竹林麥	一二三
梅澤大豆	二〇八
青柳大豆	一九〇
吟小豆	一四〇
白胡麻	一二〇
黑胡麻	一四〇
鹽(一円ニ付) 赤穗	二俵六〇
大熱	二六五
本齋	三、九五
新齋	四二五
醬油(一円ニ付) 最上	八分〇厘
極上	八八
上物	一三〇
中物	一八〇
並物	二二〇
味噌(一円ニ付) 地製上白	六、四〇〇貫
同上赤	六、五〇〇
同紅赤	四、六〇〇

品名	三月廿六日
繰綿(一円ニ付) 新坂上銘大入	七七五目
新京丹同	八〇〇
新坂丹同	八一〇
新三上銘同	八一五
新尾上銘同	八二〇
新地綿文庫入	八七〇
同並物	九〇〇
白木綿(一円ニ付) 玉鶴	三反、五〇
綾鶴	三、八〇
日ノ出鶴	四、〇〇
若柳	三、一三
間銘	三、八〇
伊勢晒(一反ニ付) 奈亘和	二〇錢
三園	一九
宮川	一八
雲井	一九
絹糸(一円ニ付) 本練花色	二五〇目
色物	二四〇
赤白	二四五
延糸	二一五
芥子糸	二六〇
薄色	二三五
色物太練	二五〇
羽二重糸	二四〇
花色絹糸好 生七十匁附	四円〇〇
同八十匁附	四四五
同九十匁附	四八五
同小節絹	
生八十匁附	三円二〇
同本秩父絹	
生百四十匁附	四円五〇

品名	三月廿六日
製茶(一貫目ニ付) 山城江州稀頭	二円四〇
同大頭	一九〇
同小頭	一六〇
同中茶	一〇五
狹山稀頭	一七五
同大頭	一四〇
同中頭	一二五
同中茶	九五
乾海苔(百枚ニ付) 洲崎	一円〇〇
大森	一〇〇
深川村	一〇〇
大師田	八〇
上總	七〇
炭(一俵ニ付) 伊豆上	四円五〇
同中	五五〇
同並	六五〇
角備上	二八〇
丸備上	二一〇
淺上	三八〇
土釜堅燒	八五〇
同切炭	七〇〇
水油(一樽ニ付) 地水	八円〇〇
胡麻	一〇二〇
荏油	一一三〇
桐油	六八〇
綿油	七一〇
坂水	八八〇
石油(一箱ニ付) チヤスター	一円六五
デボース	一六五
ホーキ	一六七
ロレヤ	一五八

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌社出版書目

書名	著者	冊数	價
つれ〴〵草講義	鈴木弘恭大人述	一冊	價金八錢
文法口授	鈴木弘恭大人述	一冊	同十六錢
百人一首講義	鈴木弘恭大人述	一冊	同三十五錢
産婦小兒攝生法	船越鼎太郎君書	一冊	同十六錢
ひめ鑑	關輪正路君纂	一冊	同四十五錢
善惡之岐	中島俊子著	一冊	同卅五錢
婚姻論	橫山雅男君著	一冊	同廿錢
廢娼演說	島田三郎、植木枝盛兩君演說	一冊	同五錢
妓樓全廢	巖本善治述	一冊	同五錢
公娼可滅	島田三郎、巖本善治同著	一冊	同四錢
植物學	農學士寺尾熊三著	一冊	同十錢
昆虫金石植物採集法	林學生星野愼著	一冊	同十二錢
和書手本	明治女學校教師八木兼辰著	四冊	同壹圓
演說著作材料	女學雜誌社編輯	八冊	同四十錢

下六番町六番地
女學雜誌社

私立女子授產場寄附金第貳回報告　潮田千勢子

金參拾圓　益森もと子
金拾圓　桂貞子
金五圓　吾妻さた子
金五圓　桑原よし子
金參圓　青山英和女學校々長　アットキンソン
金五圓　下村ちと子
金貳圓　授產場教師　ミスブラスクストック
金貳圓　海岸女學校教師　ミススペンサー
金五圓　海岸女學校々長　ミスパードー
金五圓　同　教師　ミスヘルプス
金四拾八圓　桂二郎君
每月壹圓ヅヽ、　田中令夫人
每月同　雨宮令夫人
每月貳圓ヅヽ、　桂二郎君
每月壹圓ヅヽ、　ミススペンサー
每月五拾錢ヅヽ、　宮村てい子

前號の女學ざつし

「ひさご」と假名せる一の女秀才、我社の爲に、「車の轍」といへる秀麗美妙の新小說を寄す。則はち全偏を、本誌の附錄とし、月極の花客に無代呈上す。別に注文するものは、定價四錢也。

第三版

百人一首講義

上製美本　五十錢
並製淡裝　三十五錢
郵稅六錢
同　四錢

正月の稽古に宜し
歌留多遊びに宜し
遺物に宜し
詠歌に宜し

女學雜誌社

女學生

第十一號

一層改良して出で來りぬ、春色鮮明の圖あり 花笑ひ鳥歌ふの樣紙上に躍然たり、殊に其所載の文は 本號に至りて更に一段の美觀を添へたり、閲覽せよ！此新雜誌を○

目錄左の如し

まとひの筵
文章の硬軟二派……天知子
海邊の夢現……晴光子
學校界の三奇觀……如是生
川合君に與ふる書……雲峰
陛下に感を書す……川合信水

睦びの花たば
鎌倉に遊ぶ(下)……灘栗女史
私の婚せざる理由(上の卷)……秋野女史
戀塚を過ぐ……青水女史
內大臣を悼みまつりて……岩崎菊江
吾が希望……筒井くに
憐むべき身の果て……鈴木げん子
露の命……松井せつ子

學びの志をり
漢文學＝唐詩選の解釋
翻譯考(第二)

寄せぶみ
眞淚の勇氣さいふを讀む……川合信水
墓郷……望[illegible]生

春の夜ばなし
重盛公の溺所。小堀宗匠の啞然。能因法師のかんなくづ。時平大臣の書風を改む。德川公珍菓を頒みす。

毎月一回發兌●一冊郵稅共六錢

●女學生全盟各女學校は左の如し
○明治女學校○女子學院○新榮女學校○女子師範學校○共立女學校○フェリス和英女學校○頌榮女學校○跡見女學校○立教女學校○成立舍女子部○女子獨立學校○海岸女學校○長榮女塾○東洋英和女學校○青山英和女學校○金城女學校○高田女學校

女學雜誌社發行

國民小說

特別大廉價

郵稅四錢　紙數二百九十七頁

一口劍　幸田露伴作
舞姬　鷗外漁史
胡蝶　美妙齋主人
細君　春の屋主人
眞夜　饗庭篁村
楠木　學海居士
流轉　北邨散士
新編破魔弓　南翠外史
枯花微笑　紅葉山人
大東號日記　思軒居士譯

此書の極めて廉價にして極めて面白き極めて珍奇の冊子たるは購讀諸君自ら知らん

改正價拾貳錢

東京市京橋區日吉町四番地
民友社

發行所
東京市麴町區下六番町六番地
女學雜誌社
編輯兼發行人　巖本善治
印刷人　堀口庄三

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY